



2011年(平成23年)
2月号(No. 789)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

「山の日」の制定を目指し、 山岳5団体がキャンペーン展開

成川隆顕

JACの4つのプロジェクトの1つである「山の日」制定の動きが、NHK朝のニュースで全国に放映されるなど、最近、話題になっている。そこでプロジェクトリーダーであり、5つの山岳団体で結成された「山の日」制定協議会の幹事でもある成川常務理事に、最近の動向を報告してもらった。

昨年の4月、山岳5団体が集まって「山の日」制定協議会をつくった。連携して行動をスタートさせたのは、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本山岳ガイド協会、それに日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HATJ)である。

5団体に加盟している人の数は合わせて10万人。いわゆる「登

山愛好者」は700万人くらいだから、人数としてはそう多くない。しかし、それぞれのグループのやり方を尊重しながら、呼びかけの輪をみんなで大きくすれば、風が起きて大きな力になるかもしれない。なにかが動かせると考えた。

「山の日」制定協議会

2カ月に1回の割合、持ち回りで会合をもち、各団体から理事、

目次

「山の日」の制定を目指し、山岳5団体がキャンペーン展開・・・	1
「公益社団法人」を理事会が選択、今後の流れ・・・	3
アンナプルナ内院、タルプ・チュリ登山・・・	4
ポーランドフェスティバルと、二つの栄誉・・・	5
空沼小屋(秩父宮ヒュッテ)の憂える現状・・・	6
東西南北・・・	8
磐梯山の三角点 106年ぶりに復旧/ 会報「山」への提案/アルプとヨーデル	
活動報告・・・	10
資料映像委員会/山研運営委員会	
支部だより・・・	12
東京多摩支部	
図書紹介・・・	13
会務報告・・・	16
ルーム日誌・・・	17
会員異動・・・	17
新入会員・・・	17
INFORMATION	18
図書受入報告・・・	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

事務局長が出席して運動の進め方を話し合っている。情報交換の場でもあり、横のつながりの大切さをつくづく感じている。JACからは藤本副会長、成川常務理事、永田、萩原各理事が出席している。JACのプロジェクトチームで話し合われたことが、制定協議会に反映されている。

制定協議会では『山を考える／「山の日」をつくろう』というパンフレットを、10万枚作った。5団体がお金を出し合った。それぞれのネットワークを通じて、機会あるごとに配布しており、好評である。『わたしたちは「山の日」を、日本人の生活と文化に結びついた山の恵みに感謝するとともに、うつくしく豊かな自然を守り、次の世代に引き継ぐことを国民のすべて

が銘記する日にしたいと考えます。この運動を通じて山岳5団体は、全ての登山者の安全と健康に寄与し、登山の楽しみを広く伝えたいと念願します」とアピールした。

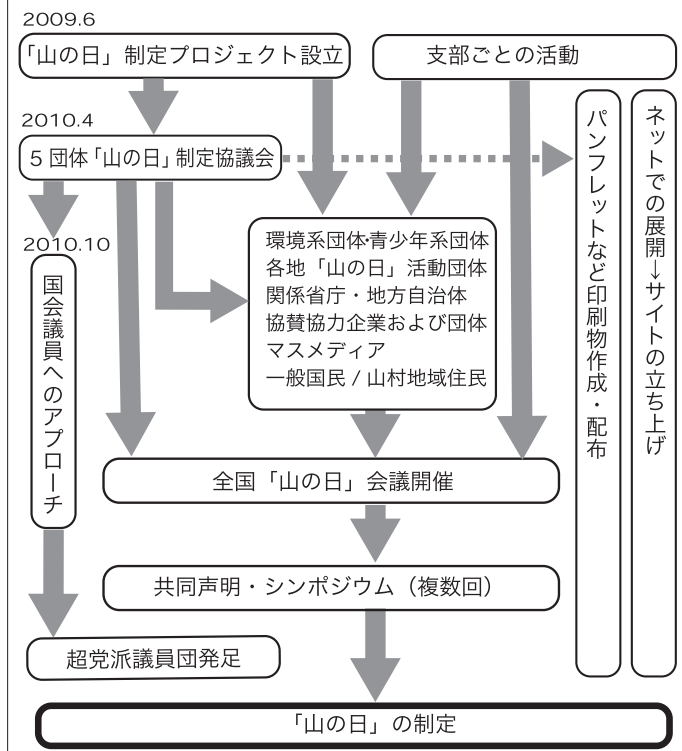
『山を考える 健康編』

4月発行の第1弾に続いて11月に第2弾の《健康編》を、日山協の担当で発行した。JACの全会員には3月の総会通知に同封して2部ずつお届けした。パンフレットは第3弾《安全編》をガイド協会が企画中で、そのあと第4弾までの発行を申し合わせている。

国会議員への働きかけは、超党派で進めるべく、ツテをたどって緒についたばかりである。

今後の進め方は左の表のとおり。5団体では国民祝日「山の日」の制定目標を2013年度中と設

日本山岳会の「山の日」の活動予定チャート



定した。実現の可能性にはさまざまな要素が関係する。祝日をこれ以上増やす必要はないという意見がある。政治、経済、環境などの社会情勢、目的達成、実現の可能性を信じてさまざまな運動を展開し、「山の日」の風を大きく吹かせることが肝要である。

支部展開とネットでのPR
間もなく新年度——。運動のパワーアップには、支部、地域での活動が重要かつ不可欠である。

地元のメディアにも働きかけ、「山の日」運動をPRしてもらってほしい。最近では1月10日、NHKが朝6時台の全国ニュースで「日本山岳会など5団体がキャンペーンを展開」と報じた（『山』1月号参照）。元気づけられた。インターネットを通して理解と共感の輪を広げたい。いま、日本山岳会や日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟のホームページには「山の日」のページが掲載され、

運動のバックグラウンドを詳しく説明し、協力支援を呼びかけている。取り上げられているテーマは、

パンフレット第2弾「山を考える『健康編』」



昨年春の理事会で、私は「山の日制定PT」の一員に加わりました。山がもっているさまざまな文化を通してさらに山を知り、山に親しむ人の輪が大きくなることを願って、というのが動機です。

この第2弾は日本山岳協会が制作を担当することになり、テーマは「健康」と決まりました。そこで、日山協・医科学委員会にも属している私が案を作ることになり、設問の工夫やデザイン面で永田・萩原両理事にサポートしてもらって、『健康編』が生まれました。発行部数は10万です。

日山協では、昨年6月に創立50周年記念事業の一環として登山と健康をテーマに国内・海外向け、それぞれのリーフレットを作成し

環境保全など「山」にかかわる問題提起として読んでも貴重だ。

たところでした。しかし、こちらは教育・啓発的なことに重きをおいたもので、いわば「転ばぬ先の杖」です。

「山の日」制定協議会のそれは、より広く周りの方々に興味をもってもらい、読んで頭を使うことが、山に登る人の「杖」になって、ルートの先に健康や活力、安全が見えるように意図したつもりです。

「山の日」をつくろう運動は、必ずしも祝日に繋がらなくともよいのではないのでしょうか。「労働安全週間」というものがあるように、登山についても「登山の安全を考える週間」あるいは「山の環境を考える週間」といった形でもよいのではないか。個人的には、そう考えています。

（堀井昌子）

法人化問題

「公益社団法人」を理事会が選択、今後の流れ

宮崎紘一

新しい法人制度に対応するため理事会は先月、「公益社団法人」への移行申請を賛成多数で決定し、3月12日に開催される平成22年度第2回通常総会に諮ることになった。

「公益」か「一般」かの選択をめぐる理事会の集中審議については、会報『山』の11月号から1月号に詳しい。1年半におよぶプロジェクトチームの検討資料、報告書をもとに、法人改革新法の狙い、JACの進むべき道、両者のメリット・デメリットなどを論議し、14人の理事がそれぞれ意思表示した。その結果、「公益法人への移行」に賛成した理事は11人、一方の「一般法人移行」は3人だった。これを受けて、尾上昇会長（議長）は「公益社団法人」への移行申請を理事会決定とした。

1月号の《マニフェスト》で尾上会長は「公益」選択を決めるまでの経緯を振り返り、会報紙上や理事会で厳しい論議が交わされたことについて「公益を唱える会

員の意見、一般が良いと述べる会員の意見、両者とも、言っていることはそれぞれ正しいのです。いずれもJACの未来を憂い、JACを慈しむ会員の心情の現れなのです」と書いて、ここまでの論争にノーサイドを求めた。

そして、JACの行なう事業（活動）は国民的事業であつて少数の登山家Ⅱ私たちだけのものではないと《創始の原点》を強調し、「一般」を推す会員・理事が主張する①JAC本来の存在理由Ⅱ山登りをする人たちの自律的なクラブであるべしという主張 ②公益事業支出に課せられる50割条項への危惧 ③監督官庁の制約からの自由——といった視点、論点について一定の理解を示しながらも、「公益法人」への移行を選択しても現行の活動内容を変えることなく新法に対応できる、それがベストの選択だとの根拠を述べている。（これまで）公益法人としての事業活動を継続してきたからこそJACの存在価値があり」「百年

の歴史と伝統を誇るJACが、次の百年へ向かつてその歩みが続けるには、公益法人こそ最もふさわしい姿であると確信しています」

1月号掲載の尾上会長のご結語を改めて記し、会員各位のご理解と賛同を得たい。

この理事会決定は評議員会の意見を聞いたうえで、3月の通常総会に議案（審議、承認事項）として提出される。12日に開催される総会案内は、やがてお手元に届くと思うが、総会には平成23年度事業計画と収支予算案も提出される。いずれの議案も総会で審議され、出席者の半数以上の賛成があれば承認される。

定款の定めで、総会は会員現在の数の3分の1以上の出席で成立し、書面（委任状）で意思を表示したものは出席者とみなされる。ご存知のとおり、委任状は議長（会長）を含む総会の出席会員に議決権を委ねるもので、だれに委任するか、適格者が明記されていないと無効になる。会員一人ひとりの意思がいかに重いものであるかを認識され、総会に出席して審議、議決に

加わってほしい。出席できない会員は、ご自分の意思が正確に反映される出席者に議決権を託していただきたい。

総会で理事会提案が承認された場合、「公益社団法人」の認定申請に向けて新法人法に適用するため、なすべき作業は山ほどある。定款、定款施行細則及び規程類の改定、公益目的事業の実施にともなう事業の仕分け及び公益目的事業費と共益事業費等の区分経理などである。

監督官庁である内閣府・公益認定等委員会とのやり取り、書類の作成——。「公益」認定に必要な要件を充たす自信はあるが、作業を急がねばならない。認定等委員会から早期申請を促されている事情もあり、残された時間は決して多くない。

定款の改定など一連の案件は、6月の23年度第1回総会までに準備を整え、議決・承認されることが望ましく、23年度中には認定を得て24年度から「公益社団法人」としてスタートを切りたいと考えている。

エクスベディション

アンナプルナ内院、タルプ・チュリ登山

南井英弘

海外登山委員会が募集している「シンガー・チュリ」への登山ルート、タルプ・チュリの肩まで登った。登山参加者募集に参考になればと思い、以下に記そう。

2010年9月20日、75歳の誕生日を自宅で祝い、家族の見送りを受け単独で出かけた。登山出発地のナヤプール(1070^メ)から5日目にアンナプルナBC(A BC 4130^メ)に到着した。

6日目は休養、周辺の散歩など。内院の壁(バタール・ヒウンチュリ、アンナプルナ南峰、主峰と主峰群、シンガー・チュリ、マチャプチャレなど)がABCを取り巻き、そのど真ん中に出ベソのように突っ立っているのが、今回登攀目的のタルプ・チュリ(5663^メ)である。

7日目、晴れ後ガス。一旦、南アンナプルナ氷河右岸モレーンの急なガラ場を下り、大きな岩や石で覆われた南アンナプルナ氷河を数百メートル右上流に遡行。左岸のモレーンが侵食され岩石が剥き

出しになっているガラ場を120^メほど直登して左岸上に出る。数本ある急峻なゴルジュ帯の一番大きな草付の上部をへつって長い草原上を登り続け、氷河舌端部近くにAC(4700^メ)を設営。初めて自分達で食事を用意した。8日目、シェルパがルート偵察とルート工作。今秋はこの山域に一隊も入っていないようだ。

9日目、2時40分、ヘッドランプをつけて出発。4時半、ラクシ・ピーク直下でアイゼンを着用して氷河を渡る。途中で夜が白んできた。タルプ・チュリの肩から連なる稜線へのヒマラヤ襷を呈した蒼水の壁は、傾斜が50度とも60度とも言われている急斜面だ。

この蒼水に取り付いた直後、左足首に激痛が走った。斜面に足裏を全面フラットに置いても、アイゼンの内側の歯だけで立とうとしても激痛が走る。試行錯誤の後、足首を曲げずに伸ばし、前爪の2本だけを蒼水の斜面に蹴りこめばなんとか登ることが出来そうだった。

シェルパの設置したフィックス・ロープにユマールを掛け、右手はバイルを使い、1ピッチが50^メ、200^メを登り切り稜線に出た。タルプ・チュリ(5663^メ)頂上まで残りは150^メほど。まだ朝の7時15分だ。サードー達は「30分から1時間あればゆつくり登れる。少し休んでいる間にルート工作をするので登ろう」と盛んに勧めてくれた。

確かにこのルートの最大の難関である核心部は突破した。あとはトレースのない純白のスロープを登るだけだ。時間は十分あったので、1時間ほど足首のマッサージをするなど回復に努めた。しかし、残念ながら完全な回復には至らず。無理して痛みが悪化した場合、シェルパに確保してもらって下降できるような生やさしい蒼水の斜面ではない。自力で下りるしかない。8時半、そんなことで主目的のタルプ・チュリ頂上を目前に登頂を断念した。

たどり着いた稜線上の肩から、遠くはアンナプルナII、IV峰、目前は内院を取り囲むバタール・ヒウンチュリ、アンナプルナ南峰とその中央峰や北峰、ファンング、ア

ンナプルナ主峰(8091^メ)と主峰山群、ロック・ノアール、足元の稜線の先にはヒマラヤ襷が綺麗なピラミダルな山容のシングー・チュリ、グレーシャ・ドーム、ガンガプルナ、アンナプルナIII峰、ガンダルヴァ・チュリ、マチャプチャレなど内院の壁が屏風のように一段と競り上がった顔を見せ、足元まで含めて全身を見せている。どの峰も下部は懸垂氷河が大小クレバスを露呈し荒々しい氷河となっている。凄い景観だ。目前にあるタルプ・チュリの山陰はモディ・コーラからポカラに流れる谷間だけ。幸い見えない山は一つもない。

ABCまでわずかの箇所を除いて登山道には石畳が敷かれ、整備されており快適だった。また、各種トレーニングのお陰で高所の影響が出なかったことが急ぎ旅のような短期間の登山になったようだ。登頂は叶わなかったが、豪華な内院の壁に囲まれたなかでの登山活動は忘れ難い思い出になった。なお山名は『ヒマラヤ名峰事典(平凡社)』に準拠。ただし、タルプ・チュリ、ラクシ・ピークは事典になく、ネパールで発行の地図や発音に従ってカナで標記した。

レクチャー

ポーランドフェスティバルと、二つの栄誉

中村 保

探検家フェスティバル

探検家フェスティバルに招待され、初めてポーランドを訪れた。この地で、心からの歓待ともてなし、優しさと気配り、最上のホスピタリティを受け、感銘した。

2010年11月19日、ワルシャワの東南に位置するポーランド第二の都会、ウツ市の大学の講堂で700人の若い聴衆を前に気分は高揚した。イベントのチームの一つとして、高校生・大学生が地理を勉強するためのプログラムに、私の「東ヒマラヤの氷河——温暖化の影響」が組み入れられた。ウツ市は人口65万人、社会主義体制時代に繊維産業（ソ連に輸出）で栄えたが、第二次大戦中にドイツにより徹底的に破壊された。空爆をされなかった古都、クラクフとは対照的である。破壊による荒廃は、後遺症として町の建物や雰囲気に残っている。フェスティバルは、町の企画としてウツ・トレッキングクラブが主宰し実行しているウツ市のプロジェクトであるが、ポーランド山岳協会も積極的にサポートしている。

翌20日がメイン・イベントである。800人を超す若い観客が溢れるコンサートホールで「最後の辺境——チベットのアルプス」をパワーポイントで160枚のスライドを使って講演をした。巨大なスクリーンなので見栄えがする。かくも大勢の若者が講演を聞いてくれたのは初めてなので感動した。日本では想像もつかないことである。ポーランド最強のクライマーの一人、クシストフ・ヴィエリツキやスロバキアのクライマーたちも来てくれた。

国際探検家賞とポーランド山岳会名誉会員

国際探検家賞の対象は登山、探検、アドベンチャー、研究の広範な分野にわたる。これまでの受賞者は、クリス・ボニントン、エドモンド・ヒラリー、ダグ・スコット、クルト・デームベルガー、リン・ヒル、マルコ・プレレジ、日本人の舟津圭三さんである。

2010年の受賞者は私を含め4人で、スイスの人力飛行士、カラコラム・ヒンズークシユの地図作成のポーランドのイェルジー・ワラさんも受賞した。

ポーランド山岳会名誉会員証書授与は探検家賞受賞と同時に行なわれた。存命中の外国人名誉会員は、クリス・ボニントン、ヘルガ・エッガー、ハリシュ・カパディア、クラパチエル・ワルテル、ナジール・サビール、ピット・シューベルトである。

ポーランドの登山界は長い歴史があり、ヒマラヤでは1980年2月にエベレスト冬季初登頂を果たして、その存在を世界にア



ウツの大学での講演会、700人の若い人たちが集まった

ピールした。山岳会の母体となるタトラ・クラブが1871年に創立され、1903年にポーランド山岳協会の前身となる山岳会ができた。しかし、第二次世界大戦後、社会主義体制になって解体され、1956年に自由化とともに復活、1974年に現在のポーランド山岳協会に集約、今日に至っている。

現在の会長はヤヌス・オニシユキエビツツ氏、政治家である。社会主義体制の時代は組織の維持に苦労したと聞いた。現在、傘下で45のクライミング・クラブ（メンバーは3400人）と22のケーピング・クラブ（メンバーは1040人）が活動している。V・クルティカ、K・ヴィエリツキ、故A・ザヴァダ、J・クルチャツプなど著名なクライマーを輩出し、2010年までに3人がヒマラヤ8000メートル峰14座を完登している。登山文化の伝統はしっかり根づいている。協会は『タテルニク』（TATERNIK ポーランド語でアルピニストの意）という立派な機関誌を発行している。

（続く）

ヒストリー

空沼小屋(秩父宮ヒュッテ)の憂える現状

安間 莊

空沼小屋とは

空沼小屋は、本会特別会員であった故秩父宮殿下の出資により、1928(昭和3)年に、札幌市南方30^キにある空沼岳の麓、万計沼のほとりに造られたスキー小屋である。建築後80余年を経て、基礎および土台の腐食による建物の傾斜と1階床の不陸により、使用に耐えないため、2007年より閉鎖されている。このまま放置しておけば変形がすすみ、近い将来倒壊消滅は必至である。

空沼小屋の現在の所有者は国立大学法人北海道大学であるが、近年の国の財政事情から不要不急な経費の削減、費用対効果の数値が低い事業の廃止などの方針が厳しく進められている。効果の見えにくい学生支援のための山小屋などの施設は、維持管理費用削減の格好の目標になり、大学当局としては施設本体の廃棄あるいは譲渡によって固定経費の削減をはかる方針と仄聞する。

補修を行なわないまま放置す

れば倒壊を免れない空沼小屋は、現在廃棄への岐路にたたされている。問題は、保存再利用するため大規模な補修を必要とする(約4000万円)、修復した空沼小屋をどこが運営管理・維持するか周辺の小屋と連携した「山小屋の鎖」を維持するスキームはどうあるべきか、などである。

緊急に補修を要する空沼小屋は、日本近代建築史だけでなく、日本のスキー登山文化史の貴重な遺産であり、登録有形文化財に値する建造物である。空沼小屋をむざむざ倒壊消滅させてはならないと志ある全国のスキー愛好家、岳人、建築家および一般市民も起ち上がっている。

空沼小屋と「山小屋の鎖」構想

修復については、有形文化財(建造物)としての原形修復を目的としているが、同時にこの山小屋を建設するに至った時代的背景(社会思想、芸術文化潮流、登山スキー文化、建築技術など)、大正期の東西文化交流(特にヨーロ

ッパとの)の大きな流れを含めてひとまとまりの文化遺産として保存伝承するものでなければならぬと考えている。

日本におけるスキー文化導入の嚆矢は、1910年代初期のフオン・レルヒ少佐や、ハンス・コラーらによるオーストリー流スキー術、これにやや遅れて1914年に北水産学科の遠藤吉三郎博士によるノルウェー流スキー術の導入とされている。日本のスキー草創期といえる1913～14年冬に、角倉邦彦らによつて富士山のスキー登山が行なわれ、見事に成功を収めたことは特筆に価する。1920年代は競技スキー、スキー登山の二つの流れに分岐するとともにそれぞれの興隆期にあたる。前者においては稲田昌植、広田戸七郎らの努力による全日本スキー選手権大会の開催、全日本スキー連盟の結成、国際スキー連盟への加入など北大を中心として活発に動いていた。後者においては札幌近郊の山々からより厳しい北海道中央山地の厳冬期スキー登山が板倉勝宣、松川五郎らによつて行なわれ、目覚ましい成果をあげることになった。1921年には

加納一郎、板橋敬一らによつて『山とスキー』が札幌で創刊され、スキー登山、スキーツアーは北海道を中心として市民の間に一大ブームを引き起こした。

1921年にスイスのチューリヒ大学に留学していた山崎春雄教授、1924年にドイツのフライブルク大学に留学していた大野精七教授が帰国し、最新のヨーロッパのスキー情報を北海道にもたらした。両北大教授は、当時、北大予科でドイツ語教師をしていたハンス・コラー、スイス山岳会会員のアーノルド・グブラー、コラーの義弟の建築家マックス・ヒンデルらと語り合い、札幌を中心として近郊に展開する「スキーツアラーのための山小屋の鎖」構想が生まれた。

まず手始めとして手稲山北麓にティネパラダイス・ヒュッテ(1926年)、白井岳北麓にヘルベチア・ヒュッテ(1927年)、そして空沼小屋(1928年)が造られた。この3つのスイス風丸太組み山小屋を設計したのはヒンデルで、当時としては珍しいスキーヤーや登山家のための本格的なブロックヒュッテであった。その

後、1935年までに札幌近郊に15カ所の山小屋が建設され、「山小屋の鎖」構想はほぼ完成した。

しかし1937年から8年間に及ぶ日中戦争、1941年からの太平洋戦争は、国民生活すべてを戦時体制に組み込んでいった。戦中戦後の混乱期には、これらの山小屋は荒れるにまかされていた。

戦前に建設され現存する山小屋は、ヘルベチア・ヒュッテ、空沼小屋、奥手稲山の家、無意根小屋の4つのみである。これらは、現在、いずれも北大の所有管理下にある。

ヒンデルの設計した山小屋はそれぞれ異なった経緯で造られている。ティネパラダイス・ヒュッテは、北大スキー部15周年事業として北大OB、企業、市民の寄付や北大の助成などによって建設されている。ヘルベチア・ヒュッテは山崎春雄、アーノルド・グブラー、マックス・ヒンデルの3人による共同建設事業であったが、1934年に北大に寄贈された。

秩父宮殿下と空沼小屋

1928年2月、北海道視察に訪れた秩父宮殿下が、新築間もないティネパラダイス・ヒュッテと



スイス風丸太組み山小屋のひとつ、空沼小屋

ヘルベチア・ヒュッテに泊まり、粉雪の林間スキーを存分に楽しめた。殿下は、このスキー行をご案内した大野精七教授から「山小屋の鎖」構想を聞き、これに深く賛同され、構想の一環として自ら山小屋を造りたいと話されたのが空沼小屋建設の端緒であった。そして、同年夏までに場所の選定、設計、監理、施工、12月には完成をみた。

1929年1月22～25日まで高松宮殿下がヒュッテに宿泊、24日「空沼小屋 Soranumakoya」と命名された。1930年2月11日から一般に開放され、最盛期には年間2000人余の宿泊利用者があったという。第二次世界大戦後の

1947年2月、空沼小屋は北海道大学に寄贈された。

1949年冬には高松宮殿下、翌年冬には三笠宮殿下が空沼小屋に宿泊され、スキー登山を楽しんでいる。戦後しばらくは北大スキー部の管理下にあったが、1957年より北大山岳部に管理が移管され今日に至っている。空沼小屋は3つのうち最も経費をかけた堅牢精緻なスキー小屋で、30人を収容出来た。建設に当たって学生や市民の多大な奉仕があったと記録されている。

ヒンデル来日の背景

一方、マックス・ヒンデルの視点で山小屋3部作を捉えるとうどうであろうか。ヒンデルが来日したのは1924年、コーラー夫妻の勧めによるものであった。当時のヨーロッパ社会は、第一次世界大戦により勝者も敗者も疲弊し、大戦末期から数年間にわたって全世界を席卷したスペイン風邪で完膚なきまで打ちのめされていた。戦後インフレは庶民の生活を直撃し、多くの失業者の群れが発生した。過激な政治思想や終末思想が蔓延し、虐げられ絶望した人々の多くはこれらへ導かれていった。

1923年、関東大震災で東京が壊滅したとのニュースが全世界に流れた。震災復興には多数の建築設計家が必要などころに、コーラー夫妻から訪日の誘いを受けた。ヨーロッパの建築技術の日本への移植が自らの使命と感じ、自ら木を切りノミを取って彫るといった能力を、十分発揮できる場を得られると思ったに違いない。

山小屋建築に対するヒンデルの思いは特別で、後年、山崎春雄に「王宮を建てたよりも、ヘルベチア・ヒュッテの建設が自分には深い喜びであった」と述懐している。タンネや白樺の森に囲まれた山小屋の雰囲気は、異国にあつて遠い祖国とを結びつける強い心の絆と感じ取っていたのであろう。

またスイスという地政、社会、宗教の多様性のなかで育ち、多様な文化に接することができたのは、ヒンデルの最大の強みであった。

1939年、ドイツの宣戦で第二次世界大戦が始まるとヒンデルは帰国を決意し、永遠の別れを告げるべくヘルベチア・ヒュッテを訪れた。その後、消息は絶え、1963年ドイツで逝去(享年76)したという。(続く)

N 東 西 南 北 S

磐梯山の三角点 106年ぶりに復旧

江花俊和

三角点は、日本全土の精密な地図を作製するために陸軍参謀本部陸地測量部によって設置されたものである。明治13年から19年まではフランス式迅速図(多色描画式)を作成していたが、ドイツで三角測量法を学んだ田坂虎之助が帰国し、大地測量(三角測量)が始まったという。

三角点は、一等から順に設置される。明治21年に一等本点が吾妻山(一切経山)に、明治25年に一等補点が猫魔ヶ岳に設置され、磐梯山には12年後の明治37年に三等三角点が設置された。

ほとんどの人は磐梯山が一等だと思っているようだが、じつは三等である。三等になった原因は、

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

一等の設置の時期に噴火(明治21年)があったからであろうと推測される。磐梯山の三角点の記録は「点の記」に、明治37年に三等三角点が設置されたことと、昭和21年の調査で「未発見」の3文字が記録されているだけである。この記録から、少なくとも64年間は、三角点がなかったことになる。

私が会長を務めている「猪苗代山岳会」は、創立50周年を迎えるに当たって、紛失した三角点の復旧を記念事業の一つにあげ、平成22年2月に国土地理院に要望した。回答は、「衛星利用測位システム(GPS)の時代なので必要性はないが、理由によっては可能性がないわけではない」という趣旨の内容であった。

多くの人が訪れ、問い合わせも多いこともあり、磐梯朝日国立公園指定60周年に当たるなどの理由をあげて粘り強く要望を続け、昨

年の5月に東北地方測量部を訪問した。そのときに「本年度の平成22年度事業計画にあげました」との報告を受けた。

6月にGPS測量で標石の確認を行なったが、あるべき所に存在しないことが判明した。そこで、9月に猪苗代山岳会を中心に3町村と関係者による「磐梯山三角点復旧支援会」を立ち上げて準備に入った。

当初想定していたヘリコプターによる搬送ができなくなり、ボランティアに頼らざるを得なくなるなどの紆余曲折があり、試行錯誤の連続だったが、10月3日の搬送には98人が集まり、急峻な登山



方角、水平の微調整をしながら標石を立てる

道を人の脊によって標石、盤石、モルタル、水などを上げることができた。

10月16日の設置には、50名の参加者が見守るなか、穴に盤石を水平に置き、その上に位置と方向を微調整をしながら標石を立てた。

その後、石とモルタルで周囲を埋め、最後に三角点「磐梯」の再設置に至る経緯を記した銅板のプレートを設置して、明治37年以来106年ぶりの三角点設置を終えた。高山への三角点再設置は東北初で、全国的でも珍しいという。

設置後、標石の真上にアンテナを立ててGPS観測を2時間30分行なった。

なお、三角点再設置時の測量の結果、1818・6^{トドル}だった標高が、1816・29^{トドル}に変更されたことが、国土地理院から発表された。

会報『山』への提案

臼木博信

山岳会の会報『山』に2つの提案をしたいと思います。

まず、配付方法について。これまで『山』そのものを第三者(郵

便などの)による配達に委ねてきました。この方法については特に不便を感じるものではありませんが、近年の社会環境の変化、すなわちインターネットの利用が広くいきたっている状況を見るに、JAC会員の多くも利用しているようであり、『山』の配付方法を改めたらどうか、と考えます。

そこで、『山』そのものを配送するのではなく、会員自身がインターネットを通じてJACのホームページから『山』を読み、必要なら印刷をすればよい。無論、インターネットを利用していない会員は従来の配付方法が継続されます。前者の会員がその旨をJAC本部へ連絡をすれば、次月より実行できるでしょう。この改定は、現在、大幅な経費節減が叫ばれているJACの固定経費節減の一方策として少額であっても実行すべきと理解します。

もう1つの提案は、これまで踏襲してきた『山』の縦書きを横書きに改めてはどうか、ということとであります。多くの会員が海外登山に行っている現実を見るに、ますます国際的なやりとりが増え

てゆくことは疑いのないところで、『山』にも外国語がそのまま引用されることが多く、この場合、横書きのほうが読みやすく便宜であると考えます。数字についても同じようなことが言える場合があります。永年、縦書きに慣れた会員には初めのうちは違和感を覚えることは想像できますが、この辺で「改革」してみませんか。

加えて、カタカナ表示が多用されていますが、特に登山用語、地名そして人名などの固有名詞には特に括弧書きで原語を入れるべきでしょう(これまでも行われてはいますが)。外国語をカタカナで表わすことには、それ自体不十分さや不可能なことが多くあります。また、和製外語や発音もよく見聞きするところです。

会員の知識をより深めるべく外国由来の言葉を正しく理解し、海外の登山やトレッキング(このカタカナ表記自体にも誤りと不十分さが1つずつあります)に行つた時によりふさわしい言葉で外国人や現地の人々と対話ができるよう、またガイドに頼りつきりにならないためにも必要なことではないでしょうか……。

アルプとヨーデル

鈴木正規

いつしか、アルプスにも春が訪れます。丘の上に立つて胸一杯に大気を吸うと、甘い春の香りが一杯にしみ渡っていくようです。乳色の陽光のなかに若やいでいるアルプスの山々から吹いてくる柔らかな春風、和やかな息づかいが山にも谷にも充ち充ちて、永い冬から開放された農民たちは、一斉に野良や牧場に出て嬉しい春の労働にとりかかります。若草の褥(しとね)の上に転がって耳を澄ますと、長閑な牛の鳴声の間から、方々の山々に訝(なげ)して、誰かが唄っている鄙(ひな)びたヨーデルの歌声が響いてきます……。

こういった静かなアルプス地方の春を想像しながら、レコードから流れ出るヨーデルの歌が描き出すその牧歌的な光景は、必ずや素晴らしい桃源郷に誘わずにはおかないでしょう。

ヨーデル(Yodel)は元来スイス、あるいはチロル地方の山男、または農民たちの間に唄われる俚謡(りよう)の折返し唄い方の一種で、ドイツ

語ではヨデルン(Yodeln)と言います。これには地声と1オクターブ高い裏声とを交互に使う特殊な唄い方が用いられるため、発声法は非常に高度な技巧を必要とし、その地方の土着の人たち以外には完全に唄える者はいないとさえ言われるくらいです。元々このヨーデルの発声法は、山岳地方の山男たちが山中で仲間を呼ぶために、遠くへとどくように自然に考えついたものだとも言われています。

ところで、私が最初に入手したレコードは表面がTHE LONESOME YODELLER 裏面はYODEL ALL DAYでした。歌手はアメリカ人のハリ・トラニで、今日までに我が国に紹介されたヨーデル歌手として最も人気のある歌い手です。彼はギターが自慢で、いつも自らギターを弾いて、素直で美しい喉を聞かせます。

この二曲もトラニの自作のなかから選んだ傑作で、いずれも三拍子の長閑な曲趣に満ちた山の気分が素朴なギターに伴奏される、限らない魅力を持つものです。歌詞も英語で唄っていますのでわかりやすい曲です。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会

アーカイブ『カラコルムへの道』を上映

11月26日、記録映画『カラコルムへの道——バルトロ・カンリ登頂』（1963年、東京大学バルトロ・カンリ初登頂の記録）を上映した。上映にあたり、同行取材した元NHKのプロデューサー、武内貞親、カメラマンの野口篤太郎両氏も参加され、50人を超す参加者とともにかつての時代を偲びつつ、感慨深く鑑賞した。

戦後、海外遠征の記録映画として、『マナスルに立つ』（16ミ）『カラコルム』『花嫁の峰チョゴリザ』『秘境ヒマラヤ』『未踏の氷壁』（いずれも35ミ）などがある。これらは映画館で上映され、未知の山岳自然をスクリーン上で楽しませてくれた。劇場映画が大衆娯楽の主流を占めていた昭和30年のころの

ことである。

テレビが普及し、家庭でも映画を楽しむようになった昭和30年代後期、海外遠征隊にNHKが初めて取材班を同行させ、テレビ用の番組を撮影した。そして3夜連続で放映した。それがこの記録映画『カラコルムへの道』である。今回、DVD作品として1時間30分にまとめたものを上映した。

スクリーンはキャラバンのポイントから始まる。1963年6月、隊はパキスタンの基地スカルドに集結、バルトロ氷河に続く荒涼とした道をひたすら歩く。重い荷を背にしたポーター、出会った村落の人たち。奥深い山ではジュラ（細い枝で編んだ吊り橋）を渡る。あの時はザーク（羊の皮で作った筏）で河を徒渉する。キャラバンで明け暮れる日々を、カメラはつぶさに追っていく。神々の座の祭壇のようなバルトロ山群、展開する



当時のポーターの姿を伝えるキャラバンの映像

山々が眼前に迫る。

そしていよいよ標高5000以上の地点にベースキャンプを設営。そこからクレバスを渡り、急峻な氷雪の壁にステップを切り、一步一步高度を上げていく。悪戦苦闘する隊員の表情、そしてついに8月4日、宿願のバルトロ・カンリの頂に立った。

武内プロデューサーと野口カメラマンは「ヒマラヤは何もかもが初めてだった」と前おきし、撮影事情を語った。16ミフィルムが高額であったため、撮影の3分の1をカラーで、ほかは白黒で撮影した。つまりスカルド、アスコレーまではカラー、その先が白黒で

撮られている。K2も、宿願のバル

トロ・カンリまでも白黒だ。鑑賞しながら、なぜここが白黒なのか、カラーで見えなかったか、と思える部分もあり残念だ。雪線を越えた場所での撮影は照明なし、現地ではアグファフィルム以外は使用できなかったのだという。これもアーカイブのよさと思って観てほしい。

また、その現像はカラチのラボで処理されるはずであったが、実際ラボの施設や技術は日本とは大きく差があり、まったく信用できなかったという。結局、日本に持ち帰って現像、16ミからTV用に起こすことになる。当然、画像が落ちることは否めない。現場の感動が画像で十分に伝えられない。プロとして、このギャップに悩んだに違いない。2人の語るパキスタンでの撮影事情から、この映画のもつ記録性の高さが伝わる。

時代を経ること半世紀、現在は登山装備や登攀技術、食糧、アクセス、映像技術などは飛躍的に発達した。それだけにこのドキュメント映像は、やがてアーカイブ作品として登山史を語るうえで、貴重な記録となることであろう。

（奈良千佐子）

山研運営委員会

上高地 山研での新年

私の目下の夢は、上高地の四季を自作写真でカレンダーを作ること。雪の上高地の写真を撮りたいとの念願がかない、昨年末30日から元旦にかけて山研に行き、冬の上高地を満喫した。出発前の天気予報は「暮れから正月にかけては大荒れの天気」とのことだった。

不安はあったが同行のO氏とともに、12月29日、京王八王子駅前から23時50分発の夜行バスに乗り込んだ。バスが釜トンネル前に着いたのは、予定より30分以上遅れた翌朝午前7時過ぎであった。

心配していた天候は、曇り空で風はややあるものの、小雪が舞う程度だったのでホッとした。釜トンネル入口にある長野県警の臨時の詰所で入山届を出し、すぐに山研へ電話連絡をした。装備を点検しヘッドランプをつけ歩き始めた。

釜トンネルの中は光があれば普通の道路を歩いているのと同じで、アイゼンはまったく必要ない。30分ほどでトンネルを抜けると、小雪程度で道も踏み固められており、何もつけずバス道を歩き出した。

大正池ホテルの前に着いたのが8時50分。ここでスノーシューを付けて池の遊歩道に行くことにした。しばらく行くと木に登っている数匹のサルを見つけた。各所で写真を撮りながら田代池、そして梓川に架かっている穂高橋を渡り右岸の道に行く。

ウェストン碑を通り山研に到着したのが11時25分、釜トンネルから歩き出して約4時間ほどであった。山研委員が昼食にと、温かい気持ちのこもった凄く旨いカレーライスを作って出迎えてくれた。年末年始の山研は1泊1万円で酒類も小銭を出して飲める。朝夕の食事は山研委員が作ってくれ



鍋料理に盛り上がった大晦日の夕食

るので、昼食を自分たちで用意すればいい。簡易型の水洗トイレが外にある。就寝場所は2階で、用意されている大型のシェラフに入り羽毛布団を掛けて寝るので、なかなか快適でさほど寒くはない。1階の食堂には赤々と燃える薪ストーブがあり、宿泊者たちはこの周りでくつろいでいる。

翌日の大晦日は午前6時過ぎに起き、すぐ近くの河童橋へ写真を撮りに行つた。寒いが雪は止んでいて風が少しあるだけ、六百山の後ろにはまだ三日月が残っていた。徐々に明るくなり、山の姿がはつきりしてきた。穂高にかかっていた雲がだんだん切れて、しだいに青空となり吊尾根まではっきり見えるようになった。夢中でシヤッターを切つた。しかし1時間くらい経過したところには、小雪が降り出し、穂高はガスがかかり見えなくなつてしまった。朝食後、スノーシューでの散策を楽しむため明神池に行くことにした。右岸の林道を歩き1時間半ほどで着き、神社に参拝後、ラーメンに餅を入れた昼飯を作り神社の傍で食べた。食べているうちに陽が出てきて神社の柱の影が白い雪に映り、これ

ぞ正月の上高地と感激した。
大晦日の夕食は鍋料理が用意され、体全体が温まる食事であった。その後はみんなで酒を飲みながら山の話で盛り上がった。都会の喧騒を離れテレビもラジオもなく、山好きの仲間が寄り添つての年越しもなかなか乙なものだと嬉しくなった。

元旦の朝食のテーブルには、紅白のランチョンマットが交互に並べられ、その上に伊達巻、黒豆、かまぼこなど、そして祝い箸が添えられていた。誰からともなく「おーっ！」と歓声が上がリ、山研委員の方達の思いがけない心遣いにみんなの顔が一斉にほころんだ。宿泊していた11人全員で新年を祝い乾杯、おせち料理、雑煮、みかん、和菓子などを頬張つた。満ち足りた新年最初の思い出深い食事であった。山好きのメンバーとの新しい出会いもあり幸な正月であった。えっ、写真の出来栄はどうだったかつて？ まだまだいい写真が撮れるかも、とまたの山研行きを目論んでいるところです。

お世話になった山研委員諸氏に感謝いたします。

(小清水敏昌)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

東京多摩支部

初の年始晩餐会、89人出席して盛大に開催

東京多摩支部では、昨年2月の設立総会開催から1年を経ようとする1月29日、平成23年の年始晩餐会を開催した。会場は設立総会と同じザ・クレストホテル立川。全会員225名のうち、89名が出席した。また設立総会以降に入会した新入会員24名のうち12名も出席している。

晩餐会に先がけ青梅警察署山岳救助隊で活躍中の金邦夫会員の記念講演があった。奥多摩での山岳遭難と救助活動の実例を示して、事故のない安全登山を訴えた。

晩餐会では、竹中支部長が東京都分境嶺踏査登山、サテライト・サロン活動、降って湧いた全国支部懇談会開催などにふれながらこの1年間を振り返り、「クラブラ

イフを大いに楽しみ、支部の会合等に積極的に参加してほしい」と挨拶。次いで来賓の神崎副会長が「日本山岳会には多くの課題がある。多摩支部がリードしていく意気込みでやってほしい。多摩在住の会員約400人のうち、半数しか支部に入会していない原因を深く考えて会員を増やし、さらに発展してほしい」と檄を飛ばした。



89人の支部員が出席した初の年始晩餐会

三水会35年史を読んで

昭和50年5月に発足、35周年を迎えた三水会の5冊目の35周年史を読んで驚いた。

かつて三水会には、有志による会外会としてジュニア会、美山会、斉藤学校が存在した。これらはそれなりに活動し、その記録も残されているが、過去の周年史でもふれられることはなかった。

しかし今回は、先と同様の会外会である武四会について、追悼とはいえあたかも三水会の会内会のごとく、その経過が述べられている。これは過去の周年史に比べ、明らかに異常である。

三水会に会内会が存在しないのは、ほかの同好会も同様で、発足

次は、新入会員の紹介。12名が壇上に上がり、それぞれが自己PRや抱負などを力強く語った。乾杯は出席者中の最長老、平野武利会員の発声で行なった。

5カ所のサテライト・サロン運営担当者から現状と今後の活動報告、宮崎副会長からの会務報告などがあった。活発で多彩なサテライト活動は、地域的に広がり、大きい東京多摩支部の大きな特徴である。

閉会挨拶は、酒井副支部長。「こ

以来の不文律である。編集責任者は15周年以降の周年史を精読したのであろうか。

三水会のこれからに、武四会との関係をすつきりさせて、三水会の「山行企画実施部門」という形にしたかどうかの記述があるが、これは本末転倒。すつきりさせる方法は唯一つ、武四会を三水会会員にこだわらず、日本山岳会の新たな同好会へ、ただちに移行させることである。

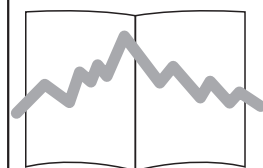
そして三水会は昭和50年5月以来、先人が培ってきた文化的サロンアルピズムに徹するべきである。ちなみに筆者は、昭和50年5月の三水会発足時から、平成22年3月まで同会に在籍した。

(高田真哉)

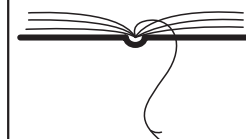
れからも力を合わせ多摩支部を盛り立てていこう」と呼びかけ、こぶしを突き上げ、「セイヤー」の気合を入れた。2年目、組織固めを推進し、支部活動の充実を図る必要を全員が共有した瞬間であった。

翌日の記念山行には43名が参加。万葉集に詠われた「多摩の横山」の「多摩よこやま道」を3班に分れて歩いた。陽光のなか、富士山・奥多摩・丹沢山塊の大展望と樹木の自然観察などを楽しんだ。

(山本憲一)



図書紹介



『梅海新道を拓く——夢の縦走路にかけた青春』



2010年12月
山と溪谷社刊
B6判 281頁
定価 1785円

小野健・著

『梅海新道ものがたり——その自然と人々』



2010年7月
考古堂刊
A5判 196頁
定価 1890円

小野健・著

白馬岳から山々を超えて最後には海に向かう縦走路をご存じの会員も多いだろう。2011年はその縦走路「梅海新道」が拓かれて40年、伐開の苦闘の中心を担っ

たさわがに山岳会50年と記念すべき年である。期せずしてその「梅海新道」に関する著書が2冊発刊されたのであわせて紹介する。

『梅海新道を拓く——夢の縦走路にかけた青春』は、71年新道開通に合わせて出版された『山族野郎の青春』の改訂版で、第一部は山族野郎の青春、第二部はそれから梅海新道で構成されている。知らぬ土地で仕事のかたわら、地域の自然や人々と接し、日本アルプスと海をつなぐ縦走路である梅海新道や山小屋開設によって夢を実現した男の物語である。

ウェストンが日本アルプスの起点であると記した飛驒山脈の末端の大岩壁が直接海に落ち込む海岸から白馬岳へと続く、全長30キロにもおよぶこの長大な道を拓いたのは、著者が創立したさわがに山岳会と純粹な気持ちで藪伐りに邁進してくれた仲間たちだ。ほかの

人が見向きもしないことにあえて取り組み、ひたすら藪を伐る。そんな日々の思い出や逸話が挟み込まれて、新道物語は脇道に逸れてなかなか一直線に進まない。完成への夢と情熱で突き進む著者たちは国有林の無許可伐開という法違反にも問われることとなる。その軋轢で悲しみも味わった挙句、供述調査までとられ弁償金を払う羽目になる。

それでも怯まない。厚生大臣の名で許可が下りるや決意を新たにす。新道のルートは、あくまでも稜線上を忠実にトレースし巻き道はしない。だが著者は藪伐り道楽の勇猛果敢な人ではなく、全コースを三期に分けて、実現可能な目標を掲げて実践していくというしたたか戦略家でもある。

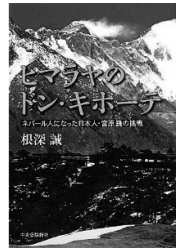
『梅海新道ものがたり——その自然と人々』は、新道をめぐる回想と植生・地質・四季と梅海の情報、宇宙に行ったササユリの話から博物館の話まで、新道から生まれた話が次々と出てくる。梅海への思いが強すぎて、著者が言うようにややまとまりに欠く面がある。巻末に詳細な梅海新道開設許可関係、山小屋建設の経緯と梅海新道実績

年表(1961~2009)がある。両著は植生・地質・ウェストン祭など内容の重複がみられ残念だが、著者の情熱は伝わってくる。ある夏、登山口で2人の若者に出会った。福岡の学生で西穂高からの縦走だという。著者の夢はこのような若者に受け継がれているのだ。著者は山溪山岳賞、NHK地域放送文化賞などの受賞と、『糸魚川の自然を歩く』など多くの著作がある。病氣から復活して喜寿を超えてなお青春の舞台だった梅海への思いは熱い。

(絹川祥夫)

根深・著

『ヒマラヤのドン・キホーテ』



2010年11月
中央公論新社
四六判 312頁
定価 1890円

本書は、ヒマラヤ登山がきっかけでネパールに長年在住、事業家から政治家へと転身した宮原さんの人生物語である。やはりネパールに入れ込んだ根深さんが、まことに的確な目で、その波乱に富んだ活動を中心に、背景の歴史や社会、さらには本人の世界観まで、実に丁寧に描いている。

その主題を大別すれば、その人生の軌跡とはどんなものだったか、観光事業展開の発想や経緯はいかなるものか、ネパール政界の歴史や現状に対しどう政治的関与しているか、という3つの局面に絞られよう。

まずその人生行路顚末。日大山岳部を振り出しにネパール、グリーンランド、南極で活動した後、ネパール発展に尽くすことこそ天命と政府商工省就職、すぐに工業化より観光振興が立国の基礎だと

悟り、旅行社創業、エベレスト山麓ホテルと首都一流ホテル建設等、大胆な事業展開を成し遂げたという筋道であり、それらは多分日本の岳界ですでによく知られていることだろう。

この冒険人生ストーリーを、根深さんの筆はとてもテンポよく語り進めており、やはりそこがこの本の最も読ませる部分になっていると思う。同様な話は、本人もあちこちで書いているのだが、改めてここで読者は、実に面白く宮原さんという人の痛快な生きざまを知ることになる。

次にその事業家活動。それは何しろ人に先んじての野心的企画であり、苦難の連続をいかに乗り越えたかというところに無限の価値がある。根源にある原動力は先見の明とか努力とかいった本人の才覚に依るとはいえ、それよりも周りの友人とか、熱意に魅せられた協力者の存在が大きく、人を呼び込んだ宮原さんの人徳こそ最大の武器だったようにみえる。

だが一方、自然を人一倍尊ぶくせに、環境を乱す事業でも魂込めれば良しとする矛盾とか、利潤追求の事業かと思うと本音は自己の

夢達成や慈善しか頭になく、大損

しても一向に懲りない強^{したた}かさとか、企業社会ではあり得ない頑固路線を貫くのを常とするので、宮原式経営とは傍から見れば遙か理解を超えるものでもある。本書では、その変節的推移のなかで苦勞が絶えず頭を抱える姿を縷々述べているが、筆者の見る目は温かく容認しているふうでもあり、突き放しているふうにも見える。

そして3つ目の政治家志願。巻頭と巻末に最近の選挙遊説行脚帯同ルポが詳しく報告されていて、宮原さんの政治活動の実態と真髓が手に取るようにわかる。並行して複雑なネパール政界の歴史から現状まで追いかけた説明が続くが、この限られた紙面ではうわっ面の解説以上は無理だし、一般の読者には本質的なところまで理解しかねよう。階層社会の権力闘争という根底を基軸にした視点に徹すれば、いくらかはわかりやすくなると思う。一方で、宮原政党は肝心の政争からはまったく乖離する純理論政党、汚職はやめて皆で経済発展だと綺麗ごとだけ叫ぶ。それが、表題にもなった風車に突撃する老騎士というアナロジーに繋がる

つてしまうのだろう。

国土開発が国民の幸福への最短路だという宮原流政治哲学は、若い頃から抱く夢と理想の反映である。しかしながら、ボストとかカリスマになる、プロパガンダで洗脳する、汚くも金で釣るなど、なんとかして夢を実現しようとする政略手段はことごとく欠落している。それは本人も自覚している半面、自説を説いてダメなら仕方ないと、居直っているのだ。

つまり誠意をもつて相対すれば通じる、と相手を信用するだけの愚直さに徹するのであり、考えてみるとそれは平和ボケの現代の日本人に共通の心情に他ならない。だから本書は実は、愛するネパール人になりきれない日本人の物語、ではないかと思うのである。

(倉知敬)

『山と人』

高室陽二郎・著



2010年12月
山梨日日新聞社刊
四六判 416頁
定価 2100円

山梨の山岳界の黎明期のこと。

「ああ、ここが北海道か、終着駅の増毛であった。蒸気を吐き、鉄工場のような音をたてて列車は止まった。私はホームに立った。キスリング型の大きなリュックサックを背負い登山靴を履き、手にはピッケルを持っていた」

この本の帯に書かれた文章です。著者の高室陽二郎氏は大学卒業後、山梨日日新聞社に入社、のちに北海道の山にあらがれ、北海道立増毛高校教諭として赴任されました。4年間、北海道の山登りの楽しさやおもしろさを充分堪能しつつ、赴任先の高校山岳部や地域の増毛山岳会の設立に尽力し、北海道の山岳史にその名を残しました。

その後、故郷の山梨に帰り、山梨日日新聞社に再入社して記者として活躍のかたわら、今度は山梨県内の山岳界の黎明期から戦後の貧しい時代を経て今日に至るまでの長きにわたり運営と発展に深く携わってこられました。

本書はその膨大な経験と記録をもとに書かれております。当時のアマチュア登山家がどんなスタイルで山に向かったか、バスや乗用車のない時代にアプローチはど

んなであったか、その苦勞と楽しさはJR中央線を利用しての山男なら幾度となく訪れた山々なので、私自身の記憶にも重なるところがあり、大変感動深い物語であります。

山行記録、エッセイまた幾多の先輩の活躍の様子や、追悼文も交えてあり、山梨の登山界の歴史を知る上でも貴重な書、ぜひ一読いただきたいと思います。

(古屋学而)

『飛驒の山 研究と案内』

飛驒山岳会・編著



2010年12月 出版刊
ナカニシヤ
A5判 306頁
定価 2625円

本書は飛驒山岳会創立百周年を記念して発刊された『飛驒白山』をベースに執筆、編集されたものである。昨年の年次晩餐会で即売されていたので、目にされた会員諸氏も多かろう。

飛驒山脈17座、北飛驒30座、高山周辺26座、御嶽と南飛驒16座、両白山地11座で、合計白山が収録されている。さらに「研究編」と

して笠ヶ岳・錫杖岳の岩場、御嶽の沢、乗鞍岳の山岳スキー、白山の山岳スキーの4地域が紹介されている。特に「笠ヶ岳・錫杖岳の岩場」の研究では中世から現在に至る両山城登山の歴史が興味深い。また岩場の紹介では昭和30～40年代、この山域でパイオニアワークとして地元の若者たちが困難なルート開拓を競った熱気が伝わってきて、自らの若き時代の登山を思い起こさせてくれる。

「あとがき」で編者代表の木下喜代男氏は「山の選定にあたっては会員それぞれのこだわりの山であること、信仰の対象となっているなど歴史があり、里人とのかわりか深い山であること(中略)メジャーな山よりマイナーな山にスポットを当てたいという拘りもあった」という。

パリリとページをめくり、目に留まった山の紹介を読んでみると、その名前すら知らない山が急に身近に感じられ、行ってみようか、との思いが自然と湧いてくるのはその地域に生まれ日々その山々を仰ぎながら育った飛驒の山岳愛好家たちの「おらが山」への思いが伝わるからだろう。

考えてみると山地が国土の7割というわが国ではどこに生まれ育とうが、われわれには必ず心の山々があるはずだ。私の場合には丹沢山塊がそれであり、丹沢に対しては特別の思いが今もある。山を愛する者は故郷の山からスタートし、より広い世界へと羽ばたくが、いずれは故郷の山に戻ってゆくのだろうと思う。本書はそんな故郷の山に対する郷愁も感じさせてくれる。

(平野裕也)

会務報告

平成22年度第9回（1月度）理事会

日時 平成23年1月12日 18時35分～20時50分

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・

藤本各副会長、成川・岡部

各常務理事、太田・堀井・

相馬・山川・野沢・中山・

谷川・永田・萩原各理事、

深川・平井各監事、近藤・

酒井・森各常任評議員

開会にあたり尾上会長から、法人改革の申請諸手続きの期限もあり本日で理事会としての合意、結論を出したい。先々月・先月に引き続き率直、活発な論議をお願いしたいとの挨拶があった。

審議に先立ち、4つのプロジェクトチームからそれぞれの活動進捗状況についての説明、報告とそれらに対する質疑、意見交換が行なわれた。

【審議事項】

1・新法人移行（公益・一般の選択）

11月理事会以降集中審議をしてきた新法人移行（公益法人・一般法人いずれかの選択）については引き続き審議し賛成多数で「公益法人」を目指すことに決した。評議員会に諮り、来る3月の平成22年度第2回総会に議案として提案する。なお、議論の内容は別途記録として保管する。

2・後援承認申請（宮崎）

兵庫県豊岡市から『一步踏み出す』こんな日本人がいた。そして今もいる。植村直己顕彰事業2011「日本冒険フォーラム」に対する後援申請があった。（承認）

3・日本山岳会誌資料使用申請（宮崎）

丹沢・心のボランティアの会から同会が発行予定の「丹沢登山100年のあゆみとその背景」に日本山岳会誌第1年第1号、第8年第3号、第11年第3号、第13年第2号、第14年第3号、第18年第2号に掲載の丹沢に関する記述および表紙（『山岳』第一年第一号）、『山岳』第六七七年に掲載の武田久吉の肖像写真1枚を使用したい旨の申請があった。（承認）

4・日本山岳遺産基金への協力願（宮崎）

山と溪谷社から同社創業80周年記念事業としての「日本山岳遺産基金」創設に伴い、同基金への協力（特別会員への参加）依頼が口頭であった。（継続審議）

【報告事項】

1・最初の評議員就任予定者の決定（宮崎）

財団法人自然公園財団から12月8日付で一般財団法人自然公園財団における最初の評議員就任予定者8名の連絡があった。

2・2011年版T M Fカードの案内（宮崎）

東京都山岳連盟から2011年版のT M Fカード（都岳連加盟団体会員向け身分証明書）の発行案内があった。

3・秩父宮記念山岳賞受賞祝賀会案内（宮崎）

同賞受賞祝賀会（発起人 伊東満日本ヒマラヤ協会理事長、他3名）から2月5日開催する案内があった。

4・SSFスポーツエイド事業終了案内（宮崎）

笹川スポーツ財団から今年度を以て事業終了する旨の案内が12月17日付であった。

5・最近の天下り・渡りの実態に関する予備調査（宮崎）

文部科学省競技スポーツ課から2009年9月19日～2010年10月1日間の実態調査依頼があり「該当者なし」と回答した。

6・特例民法法人における無報酬役員に対する謝礼等の調査結果を踏まえた対応（宮崎）

文部科学省競技スポーツ課から定款、寄付行為等の根拠規定整

備について一般的留意の文書があり、当会は該当・関係なしと回答した。

7・会員名簿新入会員追加版の発行(宮崎)

現「会員名簿2008」の追加版として2008年9月～2010年11月間の新入会員の名簿を発行する。

8・会報『山』1月号編集報告(神長)

ルーム目誌 1月

5日	常務理事会
6日	学生部 青年部
7日	山岳研究所運営委員会
11日	図書委員会 スキークラブ
12日	スケッチクラブ
13日	理事会 集会委員会 九五会
13日	フォトビデオクラブ 山の自然学研究会 山岳地理クラブ
14日	会報編集委員会
17日	総務委員会 資料映像委員会 緑爽会
18日	山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ スキークラブ

『山岳』掲載「追悼録」合本のお知らせ

『山岳』には、その年度に物故された主要な会員の追悼文が故人を偲んで収録されているが、今は亡き故人の経歴や事績を調べようとするとき、『山岳』に収録されている「追悼文」は貴重な資料である。しかし、百年史に掲載の追悼文リストから探すとなると手間がかかるので、百年史編集委員会では、『山岳』に収録されている「追悼文」のコピーを五十音順に編集して、ハードカバーの合本を作り図書室において利用者の便に供することにした。

『日本山岳会百年史(続編・資料編)』には、『山岳』第35年1号(1940年)から第100号(2005年)までの間に延べ1253名にわたり708名の追悼文が収録されている。

そこでこの全部の追悼文を収録するには、上・中・下の三分冊に分けて追悼録を編纂することにした(限定各2冊 非売品)。

第1巻: 531名/ア行～カ行・333人

第2巻: 367名/サ行～ナ行・198人

第3巻: 355名/タ行～ワ行・177人

(百年史編集委員会: 松田・松本)

会員異動(1月)

物故

赤井一隆 (5126) 10・12・28

中世古隆司 (5178) 10・12・29

丸山喜康 (10288) 10・8・28

退会

上善峰男 (8294)

小山三雄 (10555)

金子康一 (11510)

三島秀介 (12435)

高野登志弘 (12621)

坂田悦夫 (13562)

重川英介 (14404) 福岡

19日 ラブ 00会
三水会 みちのり山の会
つくも会

20日 青年部

21日 海外登山基金審査委員会

24日 総務委員会 支部活性化PT

24日 フォトビデオクラブ

スキークラブ

25日 インターネット小委員会

26日 自然保護委員会 麗山会

27日 東京多摩支部 山遊会

28日 海外委員会

29日 土曜会

31日 図書委員会 JACYO

UTH PT
1月来室者490名

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆新緑と花の奥秩父縦走

集会委員会

2年かけて全山縦走を目指します。第1回は奥秩父の雁坂峠から雲取山を歩きます。現地集合・解散。現地までの交通費は別途負担。

日時 5月27日(金)～30日(月)

行程 雁坂峠～唐松尾山～将監峠

～雲取山

集合 27日9時30分 三峰口駅

解散 30日15時 奥多摩駅

費用 3万円(宿泊、食事代、現地タクシー代)

地タクシード

定員 15名

申込 4月30日までに植木淑美

(FAX) 042-734-1498

✉ yoshimi-denali@com.home.ne.jp

*詳細はメルマガを参照ください

◆DVDの貸し出しをします

資料映像委員会

アーカイブ映画『カラコルムへ

の道——バルトロ・カンリ登頂』

(12頁に報告のDVDを東大山の会のご厚意により寄贈していただきました。ご希望があれば貸し出したいします。ぜひご活用ください。

問合 資料映像委員会 奈良千佐

子 (FAX) 03-3402-60

14

✉ mt.chisako@mbc.nifty.com

◆企画展「今西錦司 三角点を巡る——1550山登頂の記録」

国土地理院

日本山岳会などの協力により、

国土地理院に寄贈された今西錦司

元会長の地図が展示されます。登

山ルートの赤線、同行者の名前、

イワナやヤマメの数までが記され

た地図はたいへん興味深いもので

す。日本山岳会と国土地理院の関

わりも紹介しています。

期日 3月8日(火)～5月8日(日)

場所 地図と測量の科学館 特別

展示室(つくば市北郷1)

*入場無料

*特別講演を開催

・3月19日(土)11時～12時「父—今

西錦司を語る」今西武奈太郎

・4月16日(土)11時～12時「登山と

地図の見方」星埜由尚、13時～14

時「今西錦司さんのカラコルム探

検」長岡正利

平成22年度第2回通常総会開催

総務委員会

平成22年度第2回通常総会を以下の通り開催します。

日時 平成23年3月12日(土曜日)午後2時より

会場 主婦会館 プラザエフ

〒102-0085 東京都千代田区6番町15番地 TEL 03-3265-8111

議事 1号議案 平成23年度事業計画(案)承認の件

2号議案 平成23年度予算(案)承認の件

3号議案 新法人移行の選択(公益法人)承認の件

協議事項 新公益法人の定款について

当会の将来を決定する重要な議案が提出されます。

万障お繰り合わせの上ご出席ください。

ご出席できない場合は、必ず委任状を提出してください。

なお、第1回同様、新制度移行の一環として、皆様へ議案の詳細をお送りします。

問合

国土地理院 石井 (TEL) 02

029-864-5953 (FAX)

029-864-3729

◆小寺佳美 水彩画展「山と花」

期間 3月29日(火)～4月3日(日)

場所 大阪中ノ島リーガロイヤル

ギャラリー(リーガロイヤル

ホテル1F、JR大阪駅

西側よりホテル無料送迎

バス有り)

問合

小寺佳美 (TEL) 06-649

917758)

シンガー・チュリ登山隊参加者募集

海外委員会

日本山岳会において、よりレベルの高い登山活動によりクライフを充実させたいという会員や、先鋭的なクライミングは難しいとしても、ある程度登りがいのある海外登山を志向する会員も多いと思います。

そのような意欲を持つ会員に集まっていたとき、6000mから7000m級の海外登山計画を自ら立案し実行する機会を海外委員会として提供し、日本山岳会の活性化に寄与したいと考えました。

今年度はまず、ネパールのアンナプルナ山域にあるシンガー・チュリ(Singu Chuli) 6501mを目指します。同峰はアンナプルナI峰の東に位置し、フルーテッド・ピークという別名を持つ美しい山です。初登頂は1957年に英国のノイスとコックスにより北東壁からなされました。

同峰はNMAピーク、いわゆるトレッキング・ピークの一つですが、難しいほうに属し、例

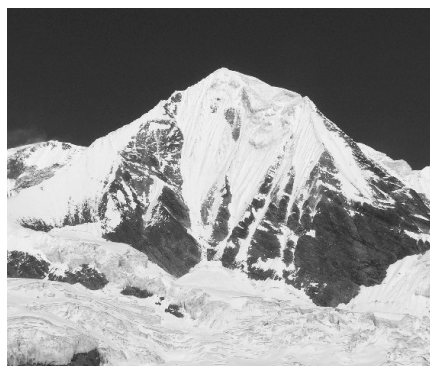
えば1982年に初登攀された西壁のグレードはEDマイナスになっています。日本人の登攀記録も多くはありません。

参加者自身で計画を立て実行するため、集会や高所順応訓練などに参加をしていただきます。年齢は問いませんが、北アルプスなどの冬山テント山行を現役として実践している方の参加を期待します。

時期 10月中旬より約25日間
申込 3月6日までに、竹花晃

へ(TEL & FAX 047169710782)

takepokhar@gmail.com



シンガー・チュリ(Singu Chuli、別名フルーテッド・ピーク) 6501m

図書受入報告(2011年1月)

著者	書名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
テーチス紀行集編集委員会(編)	テーチス海に漂う青い雲——若きフィールドワーカーたちの見聞録	570p/21cm	いりす	2011	発行者寄贈
日山協50周年記念誌編集委員会(編)	日山協五十年誌	307p/31cm	日本山岳協会	2011	発行者寄贈
太田忠行(編)	国体山岳競技の歴史	547p/31cm	日本山岳協会	2011	発行者寄贈
信州大学学士山岳会(編)	ネパール登山報告書——信州大学創立60周年記念事業	491p/27cm	信州大学学士山岳会	2010	発行者寄贈
浜谷栄彦 他(編)	リュックサック——早稲田大学山岳部 2001-2010 第14号	249p/21cm	早稲田大学山岳部	2010	発行者寄贈
成川隆顕(編)	稲門山岳会会報(特集号)——1935年～1965年の回想特集号	144p/26cm	稲門山岳会	2010	発行者寄贈
J.アーチャー(著) 戸田裕之(訳)	遥かなる未踏峰(新潮文庫 上巻)	371p/15cm	新潮社	2011	出版社寄贈
J.アーチャー(著) 戸田裕之(訳)	遥かなる未踏峰(新潮文庫 下巻)	318p/15cm	新潮社	2011	出版社寄贈
Isserman, M. Weaver, S.	Fallen Giants	579p/26cm	Yale University Press	2008	購入

◆編集後記◆

●「山の日」制定パンフレット、第2弾《健康編》が出ました。最近の動きについては、成川さんの巻頭原稿に詳しく記かれています。すが、豊かな自然を次世代に引き継ぐというその理念には、まったく同感です。パンフレットの裏面にもふれられているので、参考にしてください。

●1月理事会で「公益社団法人」を選択し、3月の総会に諮られることになりました。今後の流れを宮崎さんに綴ってもらいましたが、そのなかの尾上会長の言葉「両論の正しさ」は、理事会に同席していて痛感したことです。これからはあまり極端な「公益性」にとらわれず、これまでどおり肅々と活動していくことが肝要ではないでしょうか。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 789号

2011年(平成23年)2月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社